

『よろこばしきおとづれ』

——児童雑誌の源流——

柿本真代

はじめに

一九世紀のプロテスタント伝道は、発達した活版印刷技術を背景に、様々な印刷・出版物を用いて展開された。日本伝道の際にも、トラクト、新聞、カードなど、多様な印刷物が利用されたが、それらは福音を伝えるためのツールであると同時に、西洋からもたらされた、新たな文化でもあった。

『よろこばしきおとづれ』は、アメリカ人女性宣教師マクニール (Sophia B. McNeal) によって、一八七六年二月に創刊された伝道用の冊子である。沖野岩三郎はこれを、「わが国で初めての児童文学の雑誌」と称した。⁽¹⁾

内容のすべてが平仮名で書かれているわけではなく、子どもにはやや難解な表現も含まれていたことや、大人の女性をも読者層に見込んでいた点には留意すべきだが、子どもも読者対象に含み、大人が編集した定期刊行物⁽²⁾としては、極めて初期のものである。

ところが、児童文学の研究では、文学的な豊かさを有するか否かが主な争点となる。従って、こうした初期の雑誌

については、触れられることはあっても、その内容については「翻訳」として片付けられることが多かった。しかしながら、たとえその内容が翻訳であったにせよ、何をどのように翻訳したのかを特定することで、何が受容され、何が排除されたのかについて明確にすることは非常に重要だと考えられる。

近年では、齋藤元子の研究⁴⁾をはじめとした、『よろこばしきおとづれ』に関する優れた分析もあるものの、『よろこばしきおとづれ』が何を参照して編集されていたのかについては、依然未解決のままである。

そこで、本稿では、新聞・雑誌記事や機関誌を用いて先行研究を補いながら、まずその成立の背景を明らかにする。さらに、『よろこばしきおとづれ』が参照した海外の文献がどのようなものであったかを特定し、参照した媒体との比較・対照を通して、『よろこばしきおとづれ』の特色を描き出すことを目指す。それは同時に、日本における伝道上の特色を明らかにすることにもつながるだろう。

一 成立の背景

1 『よろこばしきおとづれ』

『よろこばしきおとづれ』は、一八七六年一二月に創刊された、一部一〇頁前後の月刊誌である(図1)。創刊号のみ『よろこびのおとづれ』、その後は『よろこばしきおとづれ』として一八八二年二月まで刊行され、一八八二年三月には『喜の音』と改題された。英題は *Glad Tidings*、すなわちよろこばしい知らせ、福音である。

雑誌の内容は、宣教師の逸話、聖書の話や讚美歌など、キリスト教に関する訓話がほとんどで、日曜学校に参加し

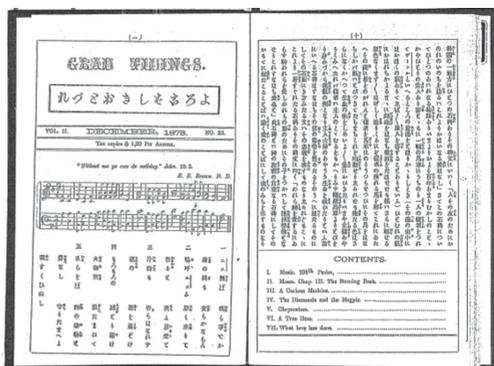


図1 『よろこばしきおとづれ』1878. 10表紙
(東京神学大学図書館所蔵)

もちろん、すべての記事をマクニールが執筆していたわけではない。『よろこばしきおとづれ』の紙面には、すでに日本で伝道を開始していたS. R. ブラウン (Samuel Robins Brown) やフローラ・ハリス (Flora Lydia Harris) の署名記事がみられるほか、日本人としては熊野雄七、高橋吾郎、奥野昌綱らがしばしば記事を執筆している。また、紙面にその名を確認することはできないが、植村正久や吉田信好、井深梶之助、伊藤藤吉⁽¹⁰⁾、主としてブラウン塾の学生たちが、翻訳や編集などの手伝いをしていたようである。

このように、多くの協力者の元で編まれた『よろこばしきおとづれ』だが、一体何を参考に作られていたのか。このことについて、重要な示唆を与えるのが、マクニールの初代助手だったという植村正久の回想である。

子どもたちに配ったほか、残りは伝道のかたわら無料で配布するなど、トラクトとして用いられたようである。⁽⁵⁾ 無料で配る以外には、各教会や宣教団体からの定期購読もあった。購読料は年間購読一〇部につき一・二ドル、のち一円二〇銭で、月に二五〇部前後、バプテスト派の宣教師、ズブラウン (Nathan Brown) のミッションプレス⁽⁷⁾で印刷・発行していた。

この雑誌の創刊にあたったのは、米国婦人一致外国伝道協会 (The Woman's Union Missionary Society of America for Heathen Lands)⁽⁸⁾より派遣された女性宣教師、マクニールであった。

マクニールは、一八七六年七月に来日し、共立女学校で教鞭をとりつつ、外国日曜学校協会 (Foreign Sunday School Association) からの資金援助を受けて『よろこばしきおとづれ』を編集・発行した。⁽⁹⁾



『よろこばしきおとづれ』の編輯者、植村正久の自筆の序文。植村正久は、この序文で、この雑誌の目的を述べ、読者に呼びかける。序文の全文は、この雑誌の巻頭に掲げられていた。序文の大意は、この雑誌は、読者の心を慰め、その生活を豊かにするために発行されるものである。読者は、この雑誌を通じて、神の恵みを知り、その恵みに感謝し、その恵みを他の人々に伝えるべきである。序文の全文は、この雑誌の巻頭に掲げられていた。



『よろこばしきおとづれ』の編輯者、植村正久の自筆の序文。植村正久は、この序文で、この雑誌の目的を述べ、読者に呼びかける。序文の全文は、この雑誌の巻頭に掲げられていた。序文の大意は、この雑誌は、読者の心を慰め、その生活を豊かにするために発行されるものである。読者は、この雑誌を通じて、神の恵みを知り、その恵みに感謝し、その恵みを他の人々に伝えるべきである。序文の全文は、この雑誌の巻頭に掲げられていた。

図4 『よろこばしきおとづれ』1878.9
(東京神学大学図書館所蔵)

図3 『小孩月報』1877.3
(上海図書館所蔵)

聖書の話、科学読み物、地理読み物や讚美歌と、『よろこばしきおとづれ』と共通するものであった。

しかし、『よろこばしきおとづれ』と『小孩月報』の類似性は、これだけにとどまらない。図3および図4を参照されたい。図3が『小孩月報』、図4が『よろこばしきおとづれ』の紙面である。ふたつを並べてみると明らかなように、これらの記事は、内容のみならず、レイアウトまでもがそっくりなのである。

『小孩月報』と『よろこばしきおとづれ』を比較してみると、図3図4のような、内容や構図の共通する記事が散見される。これらの記事を一覧にまとめたものが、表1である。

確かに、植村正久のいうように、『よろこばしきおとづれ』は『小孩月報』を参照していたようである。『小孩月報』(一八七七・五)にマクニールのメッセージが掲載されていたことや、『よろこばしきおとづれ』(二八七八・六)に、上海にあるファーナムの日曜学校に見学に行ったというマクニールの署名記事が掲載されたことから、両者のつながりが深いものであったことがうかがえる。

ところが、ファーナムは北米長老教会、マクニールは米国婦人一致伝道協会と、両者は異なる団体に所属する宣教師であった。

表1 『よろこばしきおとづれ』と『小孩月報』の共通記事

	『よろこばしきおとづれ』		『小孩月報』	
	タイトル	日付	タイトル	日付
1	ニアガラ瀑布のこと	1877.10	尼愛格拉流水	1877.4
2	難船救助場のこと	1878.3	救生船略	1878.9
3	船長ポイントンのこと	1878.8	救命衣	1877.2
4	流星説、隕石説	1878.9	天文易知第十課彗星流星隕石	1877.3
5	雪片ヲ顕微鏡ニテ見タル図	1879.1	<なし>	1877.11
6	海馬を捕る図	1879.2	捕海馬図	1877.5
7	上海長老教会ミッシオン之図	1879.8	此係清心書院主人住房	1878.7
8	支那広東ミッシオンノ図	1879.10	広東長老会福音堂図	1878.8
9	ダビデとゴリヤの話	1880.6	聖經古史	1880.6
10	フキンガル洞	1881.6	遊歴筆記	1877.8
11	マウナロアの噴火口	1881.8	三得維支海島故事	1879.8

この両者をつなぐものは何だったのか。実は、先にあげたマクニールのメッセージの上には、外国日曜学校協会の理事ダブンプート（C. B. Davenport）から、「この新聞がすばらしい成功を収めていること、私たちはみな神に感謝しています。わたしたちの協会は、必ずできる限りのお手伝いをします」とのメッセージが寄せられている。どうやら、外国日曜学校協会という団体が、『小孩月報』の運営に何らかの支援をしていたことがわかるが、この外国日曜学校協会こそが、『よろこばしきおとづれ』に資金を提供していた団体であった。

3 外国日曜学校協会とその支援

外国日曜学校協会は、日曜学校のまだ存在しない地域へ、福音と日曜学校を紹介することを目的に、会長アルバート・ウッドラフ（Albert Woodruff）とボランティアの協力者を中心によって構成された団体であった。本格的に組織化されたのは、一八七八年であるが、その活動自体は、ウッドラフが、イタリアで日曜学校を設立した一八五六年から開始されていた。¹⁶⁾

ウッドラフは、当初イタリアやドイツなど、ヨーロッパを中心に活

動したが、各地に協力者を増やし、アメリカへ帰ったのちは、ブルックリンの自宅を本部として、活動の場をさらに広げ、アメリカ在住のボランティアや世界各地の宣教師と協力しながら活動を展開した。⁽¹⁷⁾ 彼の目的に賛同するものならば、教派にとらわれず、誰でも自由に参加できたことが、多くの協力者を得た大きな要因であろう。⁽¹⁸⁾ 運営資金も、各宣教団体や教会からの献金で成り立っていたが、その資金の一部が、日本の日曜学校新聞、すなわち『よろこばしきおとづれ』の運営費になっていたのである。このことは、すでに先行研究で明らかにされている通りだが、日本への援助は、実はマクニール来日以前からはじまっていた。

マクニールと同じく米国婦人一致外国伝道教会から派遣された、共立女学校の女性宣教師、ミセス・プライン (Mary Putnam Pruyn) は、一八七一年七月から日本で日曜学校を開始したが、この日曜学校に対して、外国日曜学校協会から援助があったようであり、プラインは帰国後、会員として例会に出席している。⁽¹⁹⁾

各国への支援内容は、日曜学校の設立に必要な資金や物資の援助ということだが、黒板やカードの購入費だけでなく、各国の日曜学校新聞発行に対する費用も、外国日曜学校協会から賄われていた。ヨーロッパ地域の主要な四言語に関しては、アメリカ在住の婦人グループが翻訳・編集を担当していたが、それ以外の地域の新聞については、各地へ赴任した宣教師を通じて援助活動を行っていたようである。⁽²⁰⁾ 「外国日曜学校協会は、中国でマンダリンで書かれた子どもの新聞を創刊する手助けをした。…同様の新聞が、もうすぐ日本にもできる」とあり、中国の『小孩月報』の場合もやはり、ファーナムを通じての資金援助がおこなわれていたことがわかる。⁽²¹⁾

以上みてきたように、外国日曜学校協会の支援は、世界の日曜学校ならびに『よろこばしきおとづれ』や『小孩月報』といった各国の日曜学校雑誌の運営にも寄せられた。具体的な史料には欠くが、『よろこばしきおとづれ』が『小孩月報』を参照したのは、外国日曜学校協会の援助による先例として、協会から『小孩月報』を送付されたからでは

ないだろうか。

『よろこばしきおとづれ』が、本部を通じてデンマーク在住の外国日曜学校協会会員に送られた例があるように、⁽²⁵⁾恐らくは外国日曜学校協会の援助によって刊行された各国の雑誌は、本部にも送られ、本部からまた別の国に送付される例もあったのではないかと推測される。いずれにせよ、『小孩月報』と『よろこばしきおとづれ』は、ともに外国日曜学校協会の活動の一環として発行されていたのであり、両者が似ている要因はここにあったといえる。

創刊にあたって、日本の場合は、同じアジア圏の先例として『小孩月報』を参照することが可能だったが、中国の場合はどうだったのか。「中国から、(アメリカの―筆者)日曜学校新聞を送ってくれとの依頼があった」という記録があることから、中国では、アメリカで発行されていた日曜学校新聞を参照していたことがわかる。

ここで注意すべきなのは、日本にも、『小孩月報』だけでなく、アメリカの日曜学校新聞が送られていた可能性があるという点である。『小孩月報』と『よろこばしきおとづれ』が類似しているのは、『よろこばしきおとづれ』が『小孩月報』を参照したからなのか、あるいはともに同じアメリカの日曜学校新聞を参照したからなのだろうか。影響関係について、アメリカの雑誌を含め、改めて考察する必要があるろう。

二 比較と特色

1 影響関係

一章において、『小孩月報』と『よろこばしきおとづれ』には共通する記事が多数存在することを確認した(表1)。しかし、両者がともに外国日曜学校協会からの資金援助を受けていたこと、また外国日曜学校協会からは参考にな

表2 表1の参照媒体とタイトル

	媒体名	タイトル	日付、頁
1	<i>I.C.W</i> ^f	The Niagara Falls.	1874.6.6
2	<i>I.C.W</i>	The United States Life-Saving Service	1877.4.28
3	<i>I.C.W</i>	An Amphibious Man.	1875.4.17
5	<i>C.C.S</i> ⁱⁱ	The Voices of The Leaves and The Snow-Flakes.	15
6	<i>C.F</i> ⁱⁱⁱ	The Walrus-Hunt.	1857.7
9	<i>S.B</i> ^{iv}	David meets Goliath, and kills him.	25 - 31
10	<i>C.P</i>	Fingal's Cava・Staffa.	1854.6
11	<i>C.P</i>	The Crater of Mauna Loa.	1858.11
11	<i>I.C.W</i>	Mauna Loa.	1874.3.7

(番号は表1に対応、文献の正式名称は脚注を参照のこと)

のようなアメリカの書籍や雑誌が送られていたことを併せて考えると、それが別々にアメリカの雑誌記事を引用した可能性も考慮しなければならぬ。

そこで、表1における記事の中で、アメリカの書籍や雑誌に典拠が見出せるものはないか検討したところ、表2の結果が得られた。

つまり、表1で挙げた記事のうち、ほとんどのものが、アメリカで発行された『*The Child's Paper*』(以下*C.P*と表記) & 『*The Illustrated Christian Weekly*』(以下*I.C.W*と表記)などからの引用だったのである。

では、『よろこばしきおとづれ』の記事は、『小孩月報』の中国語から翻訳していたのか、それとも英語から翻訳していたのか。具体的な記事を比較して影響関係を考察していく。

まず、表1および表2の3「船長ボイントンのこと」という記事についてみていこう。図5、図6、図7は、それぞれ*I.C.W*『小孩月報』、『よろこばしきおとづれ』の記事だが、すべて同じ挿絵を用いていることがわかる。

これは、ニュージャージー州アトランティックシティ救命隊の隊長であったボイトン (Paul Boyton) が、新たに開発されたゴム製の潜水服のデモンストレーションを行ったという記事で、挿絵は、傘を開いたり旗をふったりして、こんなことをしてもおぼれないということをアピールしたボイトンの

此の如き海難事件は、海難救助の必要を痛感せしむるに足る。此の如き海難事件は、海難救助の必要を痛感せしむるに足る。此の如き海難事件は、海難救助の必要を痛感せしむるに足る。

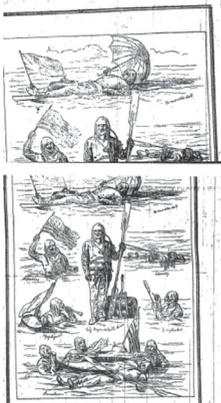


図6 『小孩月報』1877.2
 (上海図書館所蔵)



図5 The Illustrated Christian Weekly 1875.4.17
 (New-York Historical Society 所蔵)

行動を图示したものである。⁽³⁰⁾

問題は、『よろこばしきおとづれ』が I.C.W. を参照していたのか、それとも『小孩月報』だけを参照していたのかだが、ボイトンの出身地、あるいはデモンストレーションの舞台がどのように表記されているかに注目してみよう。『小孩月報』は、ボイトンの出身地を「紐約」、すなわちニューヨークと表記しているのに対し、『よろこばしきおとづれ』では「ニウゼルシイ」、すなわちニュージャージー州で救命活動をしていたと書かれている。また、デモンストレーションの舞台については、『小孩月報』では「英国倫敦」としか書かれていないのに対し、『よろこばしきおとづれ』では、「アイルランドの海岸ファステットの岬」と、より具体的に示されている。

原典だと考えられる、I.C.W. をみると、ボイトンが救命活動をしていたのは「New Jersey coast」ニュージャージーの海岸であり、デモンストレーションが行われたのは「Cape Fastnet on the Irish coast」アイルランド海岸のファステット岬となっている。



図7 『よろこばしきおとづれ』 1878.8
(東京神学大学図書館所蔵)

しても、『小孩月報』で「彗星」と訳されているものが、『よろこばしきおとづれ』では「流星」と訳されており、こ
こでも訳語は統一されていない。

これらの例をみると、『よろこばしきおとづれ』の編集は、少なくとも『小孩月報』だけを参照していたわけではなく、
適宜アメリカの文献を参照して行われていたといえるだろう。

では、『よろこばしきおとづれ』では、『小孩月報』を介さず、アメリカの文献から直接引用している記事があるの
だろうか。管見の限りのものをまとめたのが表3である。

ここに挙げた通り、アメリカの文献から直接引用したと思われる記事も、『よろこばしきおとづれ』には多数存在
していた。また、『よろこばしきおとづれ』(二八七八・三三)には「米人ウードラフ氏より横浜の女子某におくられた
る書簡」が掲載されていることから、手紙や資金とともに、参考となる書籍も、外国日曜学校協会から直接送付され

このように、『よろこばしきおとづれ』に書かれた地名の
表記が、*I.C.W.*の表記と一致していることから、少なくとも
この記事に関しては、*I.C.W.*を参照していたといえる。

また、訳語に注目してみると、ポイトンが身に付けたゴ
ム服を、『小孩月報』では「救命衣」と訳しているのに対し、『よ
ろこばしきおとづれ』では「生命服(いのちごころも)」と訳
しており、訳語についても『小孩月報』からの直接の影響
はみられない。

先に図3、図4に挙げた「流星説、隕石説」の記事に関

表3 『よろこばしきおとづれ』の記事・典拠

『よろこばしきおとづれ』		英語文献		
タイトル	日付	媒体	タイトル	日付、頁
なし	1877.1	<i>L.C^e</i>	Christ Blessing Little Children.	467 - 475
表紙	1877.2	<i>C.P</i>	なし	1855.5
イエスのふるさとナザレのこと	1877.6	<i>P.D^{pi}</i>	表紙	表紙
マタイ伝13章48節	1877.6	<i>I.C.W</i>	The Draw-Net	1873.5.3
はじめのふしぎなるわざ	1877.9	<i>L.C.</i>	The First Miracle	110 - 121
アフリカの蟻のはなし	1877.10	<i>I.C.W</i>	Fakirs	1872.2.10
サウロダマスコにゆくこと	1877.12	<i>S.F^{vii}</i>	The man who saw the great light.	278
獅子のはなし	1878.12	<i>B.B^{viii}</i>	The Lion	5-14
天然の奇観 第一 氷山	1880.7	<i>I.C.W</i>	Among the Eternal Snows	1872.3.9
天然の奇観 第三 天然橋	1880.9	<i>I.C.W</i>	Natural Bridge, Virginia	1872.10.19
イエス、ベツレヘムに生る	1880.10	<i>C.P</i>	The Saviour's Birthday	1854.12
天然の奇観第六垂井	1880.12	<i>C.P</i>	なし	1867.5
キリスト徒弟の足を洗ふ	1881.9	<i>C.P</i>	なし	1863.8

(文献の正式名称は脚注を参照のこと)

ていたことが想像できる。

しかし、『よろこばしきおとづれ』に『小孩月報』がなんの影響も与えなかったかという点、もちろんそうではない。先にも示したように、『よろこばしきおとづれ』には、マクニールがファーンナムの日曜学校へ見学に行った記事が掲載されているほか(一八七八・六)、『小孩月報』が印刷されていた、上海美華書館で作成された図版(二八七八・五)がそのまま載せられるなど、中国の伝道の様子を伝える記事が、数多く載せられている。⁽³⁾

これらの例からは、『よろこばしきおとづれ』が行する雑誌である『小孩月報』を意識しながら編集されていた様子がうかがえる。つまり、『よろこばしきおとづれ』は、同じアジア圏の、唯一先行する雑誌として、『小孩月報』からは体裁などを学びつつ、具体的な記事については、英語の文献から記事を翻訳していたのではないだろうか。

日本で新たに冊子を創刊するにあたって、元は中国伝道に従事したというマクニールにとっては、中国で発行

された雑誌は、何よりの手本になったことは想像に難くない。

このことは、裏を返せば、創刊当初こそ『小孩月報』を手本としたものの、一度編集方針が固まり軌道にのれば、あとはアメリカの雑誌から記事を引用すればいいということになるかも知れない。実際に、後雑誌である『喜の音』になると、『小孩月報』と共通する記事は激減し、多くの記事をCPあるいはICMから参照していることがわかる。ただ、少なくともマクニールが編集を担当した創刊の時期にあっては、『小孩月報』は、手本となる雑誌として、重要な役割を果たしたといえるだろう。

2 特徴

『よろこばしきおとづれ』が、ICMの記事を多く引用していたことは、先にみた通りである。しかし、実際に記事と比較してみると、完璧な翻訳であるとは言いがたく、むしろ大きく手が加えられていることがわかる。

具体的な例をみていこう。まず、表1の1「ニアガラ瀑布のこと」についてである。これは、元はICMに掲載された記事であり、ふたりの人物がニューヨークへ赴き、ナイアガラの滝を観光しながら会話するという旅行記のような内容であった。この記事は、『小孩月報』でもニューヨーク周遊記という体裁にはなっているが、会話で構成される記事ではなくなり、また滝に関する記述は大幅に縮小され、新たにニューヨークで発祥したというモルモン教に関する記述が、記事のほとんどを占めるようになっていいる。

一方で、『よろこばしきおとづれ』では、かなり短くなっているものの、ナイアガラの滝の形状や大きさ、危険性を伝える内容になっている。しかし、ICMのような会話のやり取りはなく、その中から滝に関する記述を抜き出した形になっている。

さらに、最後にはこのような箇所が付け加えられている。「…しかれどもなをこれより恐るべきものあり 悪徳これなり それ悪習の勢ひはこのナイアガラの急流よりもなを強きものなり 嗟（ああ）その流に戯る、人々よ よろしく自ら鑑むべし。『よろこばしきおとづれ』が伝道に用いられたことを考えると、ここでいう悪徳や悪習とは、おそらく偶像崇拜など、キリスト教では禁じられている行為のことであろう。このような記述は、*I.C.W.*や『小孩月報』にはみられず、『よろこばしきおとづれ』独自の編集である。

同様の編集が、表1の2「難船救助場のこと」にもみられる。これは、*I.C.W.*に掲載されたもので、*The United States Life-Saving Service*の歴史や、どのように船を救助するかなど、システムを述べた記事である。『よろこばしきおとづれ』も『小孩月報』も、ともに具体的な救助の方法を叙述している点は共通しているが、『よろこばしきおとづれ』では、ここでも、「…しかれどもすべて耶蘇教の会堂講義所および日曜学校は浪風あらしき浮世の海に漂白する人々の靈魂を救ふ場所なりと知るべし しかしてその場所には老若男女の差別なく銘々幾分か力を尽すことをすべきなり」とキリスト教の講義所や日曜学校に関する話で締めくくられている。

以上の例にみられるように、『よろこばしきおとづれ』では、多くの記事が*I.C.W.*から引用されているが、それらをそのまま翻訳することを重視していたわけではなかった。要旨は翻訳するが、そこに、さらに信仰にまつわる教訓を付け加えていたのである。つまり、参照した記事はあるものの、それはあくまでたたき台として利用されているのであって、本来の主旨は、そこから導き出していくという、説教のような編集方法であった。

この方法は、イソップ物語を紹介するときにも用いられた⁽³⁸⁾。たとえば、熊と旅人の話である。勇藏と世智助という二人の旅人が森の中を歩いていたが、獣の足跡をみて、勇藏はおびえ、世智助は恐れることはない、と言い張っていた。だが実際に熊が現れると、世智助は勇藏を置いて一人で木の上に逃げてしまった。逃げ遅れた勇藏は、仕方なく

死んだふりをしたが、熊は勇藏のまわりをうろろうしただけで去って行った。

この話の結末は、熊が去ったあと、木の上逃げた一人が、死んだふりをした一人に、「熊が君に何か話しかけていたみたいに見えたよ」と声を掛けると、「ああ熊は、友人を見捨てて逃げるような人とはもう付き合うなど言っていた」というのが一般的であり、『小孩月報』（一八七九・五）（題名は「大熊」）でもこのセリフで締めくくられている。

ところが、『よろこばしきおとづれ』では、この話も一般的なものとは結末がやや異なる。『よろこばしきおとづれ』では、「勇氣は言葉をもてあらはさず行為をもて顕すべし イエスの信徒も平日は大言をはひて迫害の起りしし時とぞ世智助の如くならざるを望むなり」（一八八一・七）と結ばれており、世智助の態度を引き合いに出しながら、口先だけの信仰を戒める教訓話に変化している。

同じくイソップ童話で有名な「亀と雁」⁽³⁾は、様々なバリエーションはあれど、大筋は、空を飛びたいと思った亀が、雁にお願したところ、亀が枝をくわえてその枝を雁が運ぶという方法でなら、と雁は承諾したが、その代わりに絶対に口を開いてはいけないと亀は忠告される。しかし雁に運んでもらっている間に、亀は約束を忘れ、口を開いてしまい、地上へ落ちていく、というものである。

『小孩月報』では、「諺云爬得高跌得重其斯之謂乎。」と中国の諺を用いながら、「高く登れば登るほど、落ちたときさほどい」というのがあるが、まさにこのことである、と結論付けているのに対し、『よろこばしきおとづれ』（一八八一・二）では「嗚呼此亀は…（略）…幸ひ雁の助ありて危急を免れんとせしも其戒を忘れて己の生命を失ひ雁の好意を無にせしとはかへすくも愚の至なり 世の人々よ此亀を見て己の戒と為し玉へ 罪の海にさまよひ偶イエスの救を捕へても世の娯楽に其身を忘れ永遠の亡に陥て悔むも其後悔は先にたゞ イエスをとらへて天の本国に伴はる、まで忍びたまへ」と結ばれる。つまり、亀が枝から口を離したことを、信仰を離れることに例え、亀と同じ結

果になってしまわないように、と戒める話に変化している。

以上みてきたように、引用元と比較すると明らかに『よろこばしきおとづれ』は説教調が強くなっており、原文を忠実に翻訳すること、あるいは物語や事物を平易に伝えることよりも、信仰の重要性を強く説くことの方が重視されていた。

一九世紀のアメリカで発行されていたI.C.W.やC.P.も、もちろんキリスト教教育のための雑誌であった。しかし、それにも関わらず、『よろこばしきおとづれ』では、原文よりもずっとキリスト教色が強く、また教訓めいた内容に変化している。それはひとつに、『よろこばしきおとづれ』が、数少ないキリスト教機関誌としての役割を担っていたからだといえるのではないだろうか。

3 役割

『よろこばしきおとづれ』が創刊された当時、キリスト教に関する定期刊行物は、一年早く、一八七五年一二月に神戸で創刊された『七一雑報』しかなかった。この週刊新聞が、基本的には一般民衆を読者に見据え、まずは大衆の啓蒙を目指し、創刊当初は全面にキリスト教色を押し出さなかったのに対し、『よろこばしきおとづれ』は、創刊号の表紙から「クリスマスのこと」と、キリストの誕生日を祝う習慣について説明する記事になっているなど、極めて宗教色の強い編集になっていたことは、先にみた通りである。

そもそも、『よろこばしきおとづれ』の創刊者であるマクニールは、この雑誌の役割について、以下のように述べている。

わたしたちは、この冊子を、ひとりひとりの女性と子どものための働き手とみなしています。わたしたち個人ならば一件しか行けないところを、この方法ならば五〇倍にできます。⁽³⁶⁾

キリシタン禁制の高札が撤去されてから、わずか数年しか経過しておらず、宣教師たちが直接伝道に携わるのにも限界があったようである。マクニールが教鞭をとった共立女学校でも、女性宣教師はわずか五人であった。⁽³⁷⁾『よろこばしきおとづれ』を配ることによって、より広く、より多くの人々へ福音を届けようとしたのであろう。マクニールは、『よろこばしきおとづれ』を自分たち宣教師と同様の働き手と考えた。だからこそ、『よろこばしきおとづれ』の記事は、信仰にまつわる教訓を、より強調する内容へと作りかえられていたのではないだろうか。

挿絵や楽譜入りの冊子が多くなかった当時において、『よろこばしきおとづれ』を広く配布することは、大いに成功したようである。『七一雑報』の発行部数が、一〇〇〇部に満たなかったのに対し、無料配布や団体講読があったにせよ、『よろこばしきおとづれ』が常に一五〇〇部以上を発行しており、年々発行部数を増やしたことが、その成功を物語っている。

『よろこばしきおとづれ』を配布していた女性宣教師のひとりには、「日本人たちは読み物が少ないのでこれをとてても大切にしている：私がそれを持っているのを見付けると、この国の人たちは遠くまで私の後を付いて来て、私を呼び止めて一部欲しいという⁽³⁸⁾」と報告しており、集会や日曜学校に参加していない人々からも、関心を寄せられた様子がある。

また、『よろこばしきおとづれ』は、マクニールら米国婦人一致外国伝道協会の宣教師だけでなく、他の宣教師団体からも多くの賛同を得ていた。アメリカン・ボードの宣教師が「女性たちはとても熱心にこれを欲しがって」いるこ

とや、定期購読の部数を倍にしたいと注文してきていることが、アメリカ本国で紹介されているほか、岡山伝道にも持参され、京都の同志社女学校でも購読されていたようである。⁽⁴⁰⁾

多くの挿絵や、楽譜つきの讚美歌を掲載した『よろこばしきおとづれ』が、日曜学校や集会の場などで役立ったことは容易に想像がつく。また同時に、はつきりと十字架やイエスを描くことによって、文字を読むことのできない人や、まだ入信していない人々にも福音を伝える、トラクトとしての役割をも果たしていたとも考えられる。この性格は、のち『喜の音』になってからも変わらなかつたようである。後継誌『喜の音』の編集者となつた三浦徹は、「もともと隠れた小さな雑誌ですが、あれを読んで信仰に入つたといふ人が随分あるようです」と回想している。

以上にみてきたように、『よろこばしきおとづれ』は、プロテスタント伝道が解禁されてから間もない明治社会において、女性や子どもにも福音を伝えたという点にその意義が見出せる。しかしもう一方で、多くの雑誌、とりわけ子ども向け雑誌を牽引した存在としての意義もまた大きい。

『よろこばしきおとづれ』の後継誌である『喜の音』は、一九二二年に至るまで、四〇年間に渡つて発行が続けられたが、一九〇〇年には一萬部を超える発行部数を誇つていたといふ。⁽⁴¹⁾ また『喜の音』の読者だつたといふ野辺地天馬は、児童文学者として活躍し、『小光子』というキリスト教児童雑誌を一九一二年一月に創刊した。キリスト教児童雑誌としては他に、一九〇七年一月には大阪で『日曜世界』が、一九一一年二月には島根で『小兵士』が創刊されたが、こうしたキリスト教雑誌の基礎を築いたのは、『よろこばしきおとづれ』であつたといえるだろう。

また、『よろこばしきおとづれ』は、キリスト教児童雑誌の出発点となつただけではない。明治二〇年代以降、少年向けの児童雑誌が相次いで創刊されるが、そうした児童雑誌のひとつにも、深く影響を与えていた。

『ちゑのあけぼの』は、一八八六年に創刊された児童雑誌だが、目的はキリスト教伝道ではなく、小学校教育を補

完することであった。『ちゑのあけほの』は、『よろこばしきおとづれ』がアメリカの児童雑誌から記事を引用していたのと同様に、『よろこばしきおとづれ』や『七一雑報』というキリスト教メディアから記事を引用し、この雑誌では、キリスト教色を排除し、道徳教育譚に作り替える形で編集されていた。⁽⁴³⁾

『喜の音』や『小光子』、そして『ちゑのあけほの』、いずれも『よろこばしきおとづれ』に深く影響を受けたことは疑いがない。これら多くの児童雑誌の誕生を促した『よろこばしきおとづれ』は、明治初期の伝道用トラクトとしてだけでなく、近代日本の児童雑誌の源流としての価値もまた大きいものであった。

おわりに

本稿では、『よろこばしきおとづれ』の成立の背景を明らかにしつつ、その特徴を描き出してきた。

『よろこばしきおとづれ』は、中国で発行されていた『小孩月報』を参照しながら編集・発行されていたが、両者はともに、外国日曜学校協会からの援助を受けて運営された雑誌であった。外国日曜学校協会からは、資金のみならず、アメリカのキリスト教児童雑誌やキリスト教新聞も送られていたようであり、これらを参照することで、『よろこばしきおとづれ』が成立していた。

ただし、参照していたとはいえ、アメリカの雑誌や新聞の記事を忠実に翻訳するのではなく、それらの記事はあくまで土台として利用しつつ、信仰にまつわる教訓を付け加えることで、より明確にキリスト教信仰の重要性を説く読み物へと変化させる編集がとられていた。それは、当時すでにキリスト教教育のための雑誌がいくつも存在したアメ

リカと異なり、『よろこばしきおとづれ』が日曜学校などの教会教育の場で用いる教材として、また未信者を信仰へと導くトラクトとしての役割を、『よろこばしきおとづれ』が担う必要があったからだといえる。

そのように、『よろこばしきおとづれ』が伝道上の役割を果たした一方で、上笹一郎が指摘するように、「児童文学的な想像力」⁽⁴⁾については、説教色が勝る余り、欠如していたといえるべきだろう。しかし、のち『少年園』などに掲載される、ビクトリア朝時代の偉人、グレース・ダーリンの伝記を掲載するなど、当時まだ知られていなかった英米文化を紹介するという意味では、一定の貢献をしたと考えられる。この点については、今後の課題としたい。

注

- (1) 沖野岩三郎『明治キリスト教児童文学』(久山社、一九九五、初版)、「キリスト教児童文学史 明治時代」「キリスト教児童文学」(一九五七—一九五九)二二頁。
- (2) 一八七三年にヘボンと奥野昌綱が子ども向けに発行した小冊子『さいはひのおとづれ、わらべてびきのとひこたへ』などは、すべてひらがなで書かれている。
- (3) 大人が書いたものではなく、子どもたちの作文や詩などの投稿によって成り立つ子ども雑誌としては、『顕才新誌』があり、一八七七年に創刊されている。
- (4) 先行研究には、主要なものに齋藤京子「よろこびのおとづれ—我が国最初のキリスト教児童雑誌」『東京都立中央図書館研究紀要』二五(東京都立中央図書館、一九九四)一—四四頁、森田絵里「三浦徹とその仕事」富田博之・上笹一郎・日本児童文学学会編『日本のキリスト教児童文学』(国土社、一九九五)四九—六四頁などがあるが、中でも、齋藤元子「『よろこばしきおとづれ』—地理教育からみた明治初期のキリスト教児童雑誌」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』四〇(明治学院大学キリスト教研究所、二〇〇七・一二)六五—九四頁は、各宣教団体等の史料から資金源を特定したもので、本稿を執筆するにあたって、多大な示唆を受けた。また、石崎康子「資料よもやま話 東京神学大学図書館所蔵『よろこばしきおとづれ』の複製本公開」『開港のひろば』一〇九(横浜開港資料館、二〇一〇・七)六—七頁では、活字の分析

から印刷所の特定がなされてゐる。

- (5) Miss McNeal, "Sunday-School Paper," *Missionary Link*, III, 3 (New York, Woman's Union Missionary Society of America for Heathen Lands, May, 1877), pp.19-20.
- (6) ただし、無料配布分を含む。The American Sunday School Union, *The 49th Annual Report of The American Sunday School Union* (Philadelphia, American Sunday School Union, May, 1878), p.31. in Barbara A. Sokolosky ed, *American Sunday School Union papers, 1817-1915* (Ann Arbor, University Microfilms International, 1980) [microfilm] reel210 ㊦-㊧ Foreign Sunday School Association, *Annual Report of Foreign Sunday School Association* (New York, Press of John A. Gray, 1879), pp.26-27.
- (7) N.ブラウンは、アメリカンバプテリスト派の宣教師。聖書翻訳に関わった。印刷所と活字については、前掲石崎論文に詳しい。
- (8) 東洋の婦人と子どもの伝道と教育、福祉を願って、サラ・ドリーマス (Sarah Platt Haines Doremus) を中心に「ニューヨークで創設された、アメリカで最初の女性宣教師団体 (坂本清音「ウーマンズ・ボードと日本伝道」『来日アメリカ宣教師』(現代史料出版、一九九九) 一一九—一五〇頁および小林恵子「婦人宣教師、ミセス・ブラインの「おばあちゃんの手紙」(一)」『幼児の教育』九一(四)(お茶の水女子大学、一九九二・四) 一四—二〇頁。
- (9) 一八七九年一〇月には築地へ移転、一八八〇年一月には、『よろこばしきおとづれ』をキダー (Mary E. Kidder) および三浦徹に引き継いで帰国した。
- (10) 佐波亘編『植村正久とその時代』三(教文館、一九三七) 三七—一頁。
- (11) Foreign Sunday School Association, *op. cit.*, p.27.
- (12) 植村正久「Glad Tidings」『福音新報』(一九〇八・七・九)。
- (13) 『小孩月報』の創刊時期については諸説ある。ファーナムが編集・発行をはじめたのは一八七五年五月だが、それ以前に『小孩月報』と題する雑誌が二種類、宣教師によって発行されているからである。詳しくは、Roswell S. Britton, *The Chinese Periodical Press 1800-1912* (Shanghai, Kelly&Wash, 1935) 郭舒然、吴潮『『小孩月報』史料考辨及特色探析』(浙江学刊) 一八三(四)(浙江省社会科学学院主編、二〇一〇・四) 一〇〇—一〇三頁、簡平『上海児童報刊簡史』(少年儿童出版社、二〇一〇) などを参照のこと。日本語の文献としては、内田慶市『『小孩月報』に見られるインソップ』(『或問』五(関西大学、二〇〇三・一) 一一三—一二七頁がある。なお、内田によると、『小孩月報』はハーバード大学図書館、Peabody Essex Museum にもそれぞれ所蔵があるというが、本稿では上海図書館所蔵のものを用いる。
- (14) 北米長老教会から派遣された宣教師。一八六〇年には上海に清心男塾(現在の上海市市南中学)、翌年に清心女塾(現在

の上海市大八中学)を設立し、教育に尽力したほか、『小孩月報』や『聖書新報』などを発行し、一八八四年から数年間は美華書館の館長もつとめるなど、印刷事業にも携わった。

- (15) North Western Department, "China," *Woman's Work for Woman*, VI, 12 (Philadelphia, Woman's Foreign Missionary Society of the Presbyterian Church, Feb. 1877), p. 427.
- (16) ウッドラフは、ブルックリンの平信徒。在野のボランティアが協力する場がないことに気が付き、一八五六年からヨーロッパを回り、イタリアやドイツなど、各地で日曜学校を設立すると同時に協力者を増やしていった。のちアメリカに戻り、外国日曜学校協会を設立 (Gerald E. Knoff, *The World Sunday School Movement* (New York: The Seabury Press, 1979), p. 92)。ASSUの副会長も務めた。
- (17) M. E. Winslow, "Sunday-School Success in the Old World," *Christian Union*, 17, 11 (New York: J. B. Ford, Mar. 20, 1878).
- (18) Anon., "The Foreign Sunday-school Association," *Christian Advocate*, 53, 13 (New York: T. Carlton & J. Porter, Mar. 28, 1878).
- (19) 前掲齋藤論文 七一―七三頁。
- (20) 小林恵子「婦人宣教師、ミセス・ブラインの「おばあちゃんの手紙」:アメリカン・シッシヨン・ホーム創立者の一人 (二)」『幼児の教育』九一(八)(お茶の水女子大学、一九九二・八)三〇頁。
- (21) Anon., "WOMAN'S MISSIONARY CONVENTION," *New York Observer and Chronicle*, 54, 43 (New York: S.E. Morse and R.C. Morse, Oct. 26, 1876).
- (22) Winslow, M. E. "THE FOREIGN SUNDAY SCHOOL ASSOCIATION," *Old and New*, 8, 3 (Boston, Lee & Shepard, Sep. 1873).
- (23) Anon., "No Title", *The Independent ... Devoted to the Consideration of Politics, Social and Economic Tendencies, History, Literature, and the Arts* (n.p., Dec. 14, 1876).
- (24) 具体的な援助については、一八七八年の時点と、*Glad Tidings* すなわち『福音』はしあおごう、れ』および日本の日曜学校に対しては四〇二・ハ〇ズル、*Child's Paper* すなわち『小孩月報』および中国の日曜学校に対しては一一三・五〇ズルであった。
- (25) Anon., "No Title", *The Independent ... Devoted to the Consideration of Politics, Social and Economic Tendencies, History, Literature, and the Arts* (n.p., Dec. 14, 1876).
- (26) Christian at Work, "BIBLE-SCHOOL WORK ABROAD," *Friend's Review: a Religious, Literary and Miscellaneous Journal*, 296, (Philadelphia, J. Tatum, Sep. 25, 1875).

- (27) トラクトや日曜学校新聞としてではなく、純粋な児童雑誌として一八五二年一月に創刊された。月刊誌、四頁建て。年間購読で月一〇部、一件につき一ドル。
- (28) 一八七一年四月創刊。家庭のための絵入り週刊誌。
- (29) 『小孩月報』は、多くの挿絵や記事を *The Child's Paper* から引用している。
- (30) I.C.W. は、Boynton となっているが、正しくは Boyton である。
- (31) 上海長老派ミッションの図(一八七九・八)や広東ミッションの図(一八七九・一〇)などの挿絵のほか、中国の風習を伝える記事(支那人先祖を祭祀すること)(一八七八・一二)やアメリカ留学を経験した中国人キリスト者、黄勝のはなし(支那人黄勝氏の履歴)(一八七七・五)が寄せられるなど、中国関係の記事は、枚挙に暇がない。
- (32) 『喜の音』(一八八五・二)の「水夫ダビートのはたらき」は『小孩月報』(一八七七・七)に、『喜の音』(一八八五・四)の「軽気球の話」は『小孩月報』(一八七七・三)に、それぞれ同様の内容の記事があるが、これらはともに *The Child's Paper* にも掲載された記事である。
- (33) ただし、イソップ童話に関しては様々な流入経路があり、必ずしも『小孩月報』からの翻訳とは断定できないため、参考までに比較することとどめる。
- (34) ただし、この話は内容自体が一般的なイソップ童話とやや異なる。また、この話はイソップ物語だけでなく、『今昔物語集』にも同様の話があり、他にも世界中に多くの類型がある。詳しくは林晃平「枝をくわえた亀のゆくへ―亀本生図・覚書―」『苦小牧駒澤大学紀要』一三三(苦小牧駒澤大学二〇一・三) 一一―二六頁。
- (35) 本井康博「初期キリスト教系ジャーナリズムにおける皇室報道」『近代天皇制の形成とキリスト教』(新教出版社、一九九六)一八九―二三八頁。
- (36) Miss McNeal, *op. cit.*, pp.19-20.
- (37) *The Japan Gazette, Hong List & Directory, for 1877* (Yokohama, Office of the "Japan Gazette", 1878), p.20.
- (38) Mrs. Viele, *Missionary Link*, K.5, (Sep. 1878), pp.16-17. 「横浜共立学園資料集」編集委員会「横浜共立学園資料集」(学校法人横浜共立学園、二〇〇四) 八七頁。
- (39) American Sunday School Union, *op. cit.*, p.31.
- (40) 吉岡弘子訳「日本の京都にて、一八八〇年三月二六日、チャイルド苑」坂本清音監訳「アメリカン・ボード宣教師文書―同志社女学校女性宣教師を中心として―(スタークウェーザー書簡―訳および註―)(六)』『Asphodel』四七(同志社女子大学英語英文学会、二〇一二・七) 二〇六頁。

- (41) 『福音新報』(一九二五・九・五)。
- (42) 一九二二年二月『あをぞら』に引き継がれて終刊(前掲森田論文 六一頁)。
- (43) 拙稿『総合的児童雑誌『ちびのあけぼの』の誕生…近代日本における西洋児童文化の受容とキリスト教』『児童文学研究』四四(日本児童文学学会、二〇一一) 一一―一四頁。
- (44) 上笙一郎「〈宗教児童文学〉の構図―神道・仏教・キリスト教系の児童文学―」日本児童文学学会編『児童文学の思想史・社会史』(東京書籍、一九九七) 一四四頁。

表注

- (i) *The Illustrated Christian Weekly* 本文を参照。
- (ii) Edwin A. Abbott. *The Child's Christmas sheaf from the Bible field* (Boston, American Tract Society, n.d.).
- (iii) *The Child's Paper* 本文を参照。
- (iv) Horace Hooker. *Scripture biography for the young with critical illustrations and practical remarks: David and Solomon, including Saul and Rehobam, Gallaudet's series* (New York, American tract society, [1843]).
- (v) William Hanna. *The Life of Christ* (New York, American Tract Society, 1863).
- (vi) American Tract Society. *The Peep of the Day; or a Series of the Earliest Religious Instruction the Infant Mind is Capable of Receiving; with Verses Illustrative of the Subject* (New York, American Tract Society, n.d.).
- (vii) Favell Lee Mortimer. *Scripture Facts in Simple Language: or Here a Little There a Little* (New York, American Tract Society, n.d.).
- (viii) American Tract Society. *Beasts and Birds of Africa* (New York, American Tract Society, 1870).

【付記】資料調査にあたっては、陸文祺氏にお世話になりました。また本稿執筆にあたって、多くの方からのご助言をいただきました。また、このことを記して感謝申し上げます。なお、本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費の助成を受けた成果の一部である。